

# 海獣人

## カリブ海の捕鯨事情①

2022年10月にスロベニアで開かれた第18回国際捕鯨委員会(IWC)総会に、カリブ海諸国からはセントルシア(SL)とアンティグア・バーブーダ(A&B)の2か国から代表が一人ずつ来ていたのだが、IWC管轄下でのカリブ唯一の捕鯨国であるセントビンセント・グレナディーン(SVG)からは誰も参加していなかったことに疑問を抱いた。その後、カリブ海の捕鯨事情や水産業について知りたいと思い、今年4月16、17日の約2泊、SL、SVG、A&Bの順に滞在し調査してきた。今回の連載では、早聞きして感じた「トビ」を時系列で紹介する(全8回掲載)。



42 松下政経塾 期生 松田 彩  
1988年7月広島市生まれ、35歳。米国・オハイオ州立大国際関係学専攻、中国・北京大大学院哲学部中国哲学専攻、回国で15年間生活した。2021年度松下政経塾に入塾し現在3年目。日本と諸国の3か国がバランスの取れた関係を築き、平和な生活を守るために、為政者を目指す。食料安全保障や難民防衛などの観点から、日本の一次産業を強化したいと見え、特に漁業振興を提議。海洋大国・日本を自覚す。



sea mossと呼ばれる海藻の養殖現場で作業体験

している。そして、経済的なつながりを強めているのだ。

# 3か国の実情みて歩き

メキシコ湾の南に広がるカリブ地域は、南米大陸からのカリブ民族などの定着が始まっている。しかし、コロンブスがインドと勘違いしたところから「インド」と呼ばれ、それ以降、カリブの島々は西欧の植民地となり、アフリカからの黒人奴隷がプランテーションの労働力として連れてこられた。もともと住んでいた先住民はほとんどが絶滅されたという歴史もあり、さまざまな住居があったにもかかわらず、黒人はほとんどいない。

セントルシア  
「メキシコ湾の南に広がるカリブ地域は、南米大陸からのカリブ民族などの定着が始まっている。しかし、コロンブスがインドと勘違いしたところから「インド」と呼ばれ、それ以降、カリブの島々は西欧の植民地となり、アフリカからの黒人奴隷がプランテーションの労働力として連れてこられた。もともと住んでいた先住民はほとんどが絶滅されたという歴史もあり、さまざまな住居があったにもかかわらず、黒人はほとんどいない。」

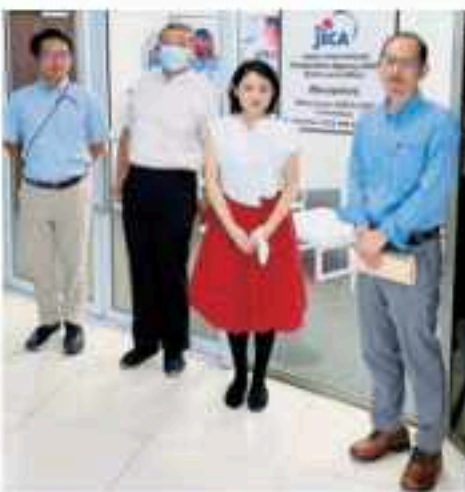
ナバルで、タフで壊れな「。現地の人々は日本の車にとても愛着をもっている。SL、A&B、SVGの3か国とも、1980年11月に諸国から独立した。左側連邦の国である。正式な外交関係は、宗主国の英国から3か国が独立したあとに週(さかのぼ)る。日本は長年、国際協力機構(JICA)を通じて、建物や橋、エンジンなどのインフラ提供だけでなく、技術や制度づくり、人材育成といった協力を行っている。

「海藻下リンク」  
JICAセントルシア事務所の皆さんから、ブルーエコノミーの推進の一環としての「海藻下リンク」(sea moss)について教えていただいた。日本の技術や知見が彼らの雇用機会を生み出し、seamossリンクがスーパーに並んでいるのをみて、収入増加に喜んでいると分かった。うれしく感じた。一方で、大西洋沿岸諸島は、海藻・サルガンサムが重要な産業であり、観光業や水産物に悪影響を及ぼしている。

「海藻下リンク」  
この強い結びつきが、そもそも捕鯨から始まっているのは存じだろうか。72年にストックホルムで開催された国連人間環境会議で、環境保護の観点から捕鯨のモラトリアムが提議されたこと、人類は鯨との関係の改善を余儀なくされた。しかしながら、日本は「鯨を食む」ための水産資源は、科学的根拠に基づき持続的に利用すべきだ」という理念を共有する仲間と連絡網を回ってきた。カリブ海諸国の発展を促す。日本はIWCの中でも自信をもった捕鯨国として、独自のSDGsの取り組みを、



カリブ海諸国



JICAセントルシア事務所にて三村所長(右端)らと記念撮影